
愛をする

カルマ20号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛をする

【Nコード】
N7570S

【作者名】
カルマ20号

【あらすじ】
私は自分が惨めだなんて思わない。2009年クリスマススイブの物語。

私は自分が惨めだなんて思わない。

木曜日の夜十時過ぎ、電車の中は特に混んではいけないけれど座れるほどでもなく、手すりに掴まってぼんやりと自分が降りる駅に着くのを待っていた。

平日の夜ということもあってか疲れた顔の人が多い。

そういう私も疲れた顔をしているのは容易に想像がつく。視線を上げればガラスに映った顔を確かめられるけれど、そこまで自分を貶めたいわけではない。残業帰りのボロボロの姿は悲惨の一言に尽きるのだから。正直、肩にかかる鞆の重みさえも辛い。

そのまま視線を下ろして、手持ち無沙汰だった右手をなんとなく見る。

ピアノをやっていたせいか指が長いのが数少ない自慢の一つだったけれど、今は荒れてとても人に見せられるものじゃない。

さらに薬指のマニキュアが剥がれているのを見つけて憂鬱な気分になる。ネイルケアなんて最後にまともにしたのはいつだろう。

毎日、義務のように化粧はしているけれど、それも日に日に素っ気なくなっているのは自覚している。

いつからだろう、新色のグロスやマニキュアに心惹かれなくなったのは。美容院に行く頻度も減っているし、スキンケアもおざなりだ。

毎日、残業に追われて自分の時間が少ないのも原因かもしれない。美に費やす情熱は余裕から生まれる気がする。

いや、本当は時間ならあるのだ。土日なんか、たまに友人と会うときくらいしか予定は埋まらない。ただ溜まった家事を一通り済ますと疲れて、残りの休日をテレビを眺めながらぼんやりと過ごして

しまっているだけ。

でも、それも残業さえなければ洗い物なんか平日にできるのだから。つまり現代日本の社会が悪いということか。そんなくだらぬことを考えて思わず苦笑してしまう。

本当は、今日は珍しく仕事が手早く片付き、定時とまではいなくても七時前には退社できるはずだった。ただ後輩が時計を気にしながら泣きそうな顔になっているのを見過ごせなくて、つい書類の整理を請け負ってしまった。明日の金曜に有給休暇を取り、土日と合わせて三連休になっているので柄にもなく後ろめたい気分になっていたのもあるかもしれない。

後輩を喜ばせてあげたのだから、少しはあつた罪悪感も薄れたけれど。

あの子は何度もお礼をいいながら、会社から出ていった。きつと待っている人がいるのだろう。

だって今日はクリスマススイブなのだから。

視界の端に色鮮やかなイルミネーションが見えた。

駅ビルの中にある深夜まで営業しているスーパーマーケットはこんな時間だというのにまだそれなりに人がいた。

やはりクリスマススイブだからだろうか。心なしか二人連れの客が多い気がする。

狭い通路を塞ぐ彼女らに辟易しながら、目当てのものを籠に放り込んでいく。

アボカド、トマト、チーズ、クラッカー……、最後にお酒のコーナーに行つたところ、後ろから不意に声を掛けられた。

「あー、美佐ちゃんだ」

甘つたるい声で私を『美佐ちゃん』などと呼ぶ人物の心当たりは一人しかいない。

ゆっくりと振り返る。

そこには私の土日を埋めてくれる数少ない友人でもある里香が、彼女の恋人の望月くんと一緒に立っていた。

「わあ、凄い偶然、美佐ちゃんも買い物？」

「うん、まあ」

ここに買い物以外に何をしにくるのだろうか。

そんな疑問を抱いているうちに里香は私の買い物籠の中を遠目に物色したようで、遠慮なく話しかけてきた。

「んー、その買い物ってことは、美佐ちゃんもこれからお家デートかな？」

いきなり痛いことを突いてきた。

「ん、いや、ああ」

私には曖昧に笑うことしかできない。

どこにこんな疲れ果てた顔とメイクと服装でクリスマスデートに臨む女がいるのだろうか。

里香は対照的に非常に可愛らしい格好をしていた。化粧は派手になりすぎない程度に明るい色を使い、美容院でセットしたのか髪は緩く巻き毛になっていて彼女をより女らしく魅せていた。身にまとっている真っ白なコートもシンプルながらけして安物ではないだろう。まるで女性誌のモデルのようだ。

「私はね、望月くんとね、食事してきたの。ホテルの最上階のレストランでね、イルミネーションが凄くきれいだったあ」

聞かれもしないのにこんなに喋るとはよほど楽しいデートだったのだろう。彼女は昔から興奮すると饒舌になる。

傍らの望月くんに視線を向けると申し訳なさそうに会釈をしていた。彼も彼で、カシミアだろうか上品な色合いのハイネックのセーターにジャケットを合わせて気合を入れた服装だと見て取れた。

「あ、そだそだ。美佐ちゃん、見てみて」

そういつて里香が一步私に近づく。微かに香水の匂いを感じてなぜだか私は泣きたくなった。

そして彼女が差し出したのは左手だった。

何を見るといふのだろうか。まず私が見張ったのはその手の白さだった。そしてささくれ一つない指先と、丁寧にネイルアートが施された爪。

どうやったらこんな綺麗な手になるのだろうか。思わず自分の手を握り締めていた。

私と彼女では違いすぎる。

まじまじと指を凝視していたのをどう勘違いしたのか里香は嬉しそうに言葉を続けた。

「そっちじゃないの、そっちでもよかったんだけどね、今年はこちら」

そついつて右手の人差し指で左手首を指した。

なるほど、そこには細い鎖で繋がれた腕時計があった。ピンクゴールドの鎖は里香が手首を返すたびにシャラシャラと小さく音を立て、文字盤にはダイヤモンドらしい石が一つ嵌められている。そして誰でも知っている有名ブランドのロゴ。

どうやらこれが彼女のご機嫌の理由の一つのようだ。この前雑誌のギフト特集で見たばかりの時計を見せられて複雑な気分になる。

「へえ、里香、良かったね。しかし、望月くんにこんな甲斐性があったとはね」

やっとの思いでそれだけいう。

「でしょでしょ。もう私嬉しくって。で、私、安物しか用意してなかったから、これからシャンパンでも買ってデートの続きを望月くんちでやるうかなって」

それでようやく合点がいった。確かに望月くんの家はこの駅の近くにあるし、そういうことならお酒のコーナーで鉢合わせしても仕方ない。

ついでに彼がワインの類に目がないことも聞いているから、季節柄も合わせてシャンパンとは里香なりに考えたのだろうか。

「んー、でもシャンパンって結構高いねえ」

棚に並んでいるピンを眺めながら、彼女は呟いた。

里香は以前聞いたときは家事手伝いだっただ。確かに定期的
に収入がないのではシャンパン一本でも買い渋るかもしれない。
私にはそれほど高いものには思えなかったけれど。安いものなら
美容院でのセットより値は張らないはずだ。

「あ、スパークリングワインってシャンパンだよ。これ安い、こ
れにしよう」と

そういつて彼女はラベルにイタリアの国旗が描かれたものを取り
出し、望月くんが先ほどから持っていた籠に入れた。

「美佐ちゃんは何買うの？」

そういわれて思い出した。私もお酒を選びに来たのだ。

適当に物色して、半分見栄もあって里香が選んだものより随分と
高いものを籠に入れる。

「わー、高いの選んだね。この国旗はフランスのかな」

「うん、奮発しちゃう」

正直、このとき僅かながら里香に対して優越感を感じていた。

高いお酒が買えることと、フランスのシャンパーニュ地方産のも
の以外は厳密にはシャンパンと呼ばないことを知っていることを。

だって私は今夜独りなのだから。これくらいはしても許されはず
だ。

「けど美佐ちゃん、恋人いるなら教えてくれてもいいのに。そんな
にいいシャンパン買って、やっぱりこれからお家デートなんだ」

「違うの、お家デートじゃなくて……」

嘘にならないように言葉を選ぶ。

「今日飲むんじゃないの。ほら、私、こんなに疲れた格好してるし
わかるでしょ」

「えー、あー、そうなの。ああ、明日の準備かあ」

里香はそう呟いて、私の格好を値踏みするように一瞥して微笑ん
だ。

「じゃあ、あとはチキン買いに行こう。クリスマスだし。レジの側
にまだあったはずだよ」

そういつて里香は私と望月くんの手を引つ張っていった。

やっとの思いで帰宅する。

当然、出迎えてくれる相手もなく暗い部屋に向かって「ただいま」と呟く。

里香に半ば無理やり籠に押し込まれたローストチキン二人分が妙に重い。シャンプンのビンはこんなに軽く感じるのに。

残業よりも里香と喋るほうが疲れた。

今日だけは彼女と会いたくなかったのに。

部屋着に着替え、買い物したものを手早く片付ける。けれどやはりチキンだけはどうしてもしていいかわからない。

彼女は今頃、望月くんと安物のスパークリングワインを飲みながらこれを食べているのだろうか。

どうしようもなく悔しかった。

どうしようもなく悲しかった。

なんで里香はあんなに綺麗なのだろう。私が仕事で疲れ果ててみすぼらしい格好をしているのに、彼女はあんなにお洒落をして恋人と食事を楽しんでいる。

涙が出そうになるのを堪える。まだメイクを落としていない。これ以上ひどい顔になるのは耐えられない。

お腹が減った。

昼から何も食べてない。

気がつくときキンを手に取っていた。

貪りつく。

大口を開けて齧りつく。

冷えた肉は硬くてまずかった。

それでも食べた。

二本目にも手を伸ばした。

いつのまにか泣いていた。

泣いてるのか食べてるのかもうよくわからない。
どうしようもなくクリスマススイブが憎かった。

気がつくと一時近かった。

怖くて鏡は見られない。

そんなとき携帯電話の振動の音が聞こえた。

慌てて鞆から取り出し、ディスプレイを確認する。

やはり彼からだった。

「もしもし」

声は震えていなかっただろうか。泣いていたのを気づかれたくはない。

「もしもし、俺」

でも声を聞いてまた泣きそうになった。

「うん、聞こえてるよ、望月くん」

「ああ」

そういつて、二人とも沈黙する。何を話せばいいのだろう。迷った末に出たのは一言だった。

「里香は？」

「今、部屋。俺はタバコ吸うって出てきた」

「そう……」

そしてまた沈黙。なんとか言葉をひねり出す。

「里香、前に会ったときに『望月くんがいつもケータイ持ち歩いて怪しい。履歴も消してるみたい』って愚痴ってたよ」

「そうか……」

いつからだろうか、彼とこんな関係になったのは。なんとなくこ
うなり、なんとなく続いてしまった。

「里香は、門限は？ 確か終電まででしょ」

こんなにも辛いのに、里香のことを話さずにはいられない。

「タクシー呼んだから、間に合うはず」

「ふうん、慣れてるんだ」

苦しいのに、辛いのに、ナイフで傷口を抉られてるようなのに、それでも私は望月くんの答えを待たずに言葉を続けた。

「ねえ、今日、里香とセックスした？」

電話の向こうで微かに彼が息を飲んだ音がした。

「ねえ、したの？」

もう一度聞く。

「……した」

観念したかのように、彼は呟いた。

「そう」

私は彼に何をいわせたいのだろう。

私は彼に何を期待しているのだろう。

また泣きそうになる。

「明日、来るんだよね？」

無理やり話題を変える。

「ああ」

ほっとしたようすで彼が返事をする。

「待つてるから。シャンパン冷やして」

そんな彼の様子が愛しくて私の声も幾分か柔らかくなる。

「ああ、楽しみにしてる」

その言葉が嬉しくて、涙が零れた。

「プレゼントも、用意してるから」

泣いていることを気づかれないうつ細心の注意を払う。

「楽しみにしてる」

私は泣いてなんかいない。必死にそう言い聞かせる。でもそうすればするほど涙は溢れてくる。

「私だってプレゼント楽しみにしてるから」

彼はひどい人だ。こんな日に私を泣かせるなんて。

「ああ、奮発したよ」

だからこれくらいの反撃は許されるはずだ。

「里香と同じのは嫌だからね」

彼が息を飲んだ音がした。そうだろう、里香のしていた時計は私が欲しいと以前こぼした物なのだから。

「……時間。里香は平気？」

沈黙が辛かったのもあつてつい助け舟を出してしまう。

「ああ、うん、じゃあ、俺、そろそろ」

確かにそろそろ怪しまれる頃合だから仕方ない、と心の中で呟く。

「美佐、おやすみ」

「おやすみ、望月くん。愛してる」

最後の言葉が彼に届いたかわからない。すぐに切ってしまうのが彼の癖だから。

でもそれでいい。

私は明日、部屋を片付けて、料理を作って彼を待つのだ。

マニキュアも塗りなおさなきゃ。

最高の笑顔を見せて、彼を絡めとる。

だから私は自分が惨めだなんて思わない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7570s/>

愛をする

2011年4月26日11時55分発行